

「台湾に行ってきたのぉー」

感激の面持ちでMはさっそくおみやげ話。「地下鉄は、日本より綺麗だったよ！プラットホームに広告用のテレビがいくつあつて、

『電車男』とか『ごくせん』のCMしてた」。へえ。「日本のデパートは苦戦してるみたいだけど台湾の三越はすごい人込み」。へーえ。

台湾の「青山」とかブランド通りも歩いたそう。「けっこう、日本に似てるんだね」と言うど、「大きな建物は日本の企業が作ってるものも多いみたい」。へえ。

3へえになったところで、Mはおみやげを広げた。中から、奇妙な真空パックが。「鉄玉」と書かれた謎の食べ物だった。これ何？ Mはニヤニヤしている。「食べて」。でも恐すぎる。30個くらいの真っ黒な卵がびっちり並んで、見たところ食べ物じゃないよ、これは。今にも奇妙な生命体がウヨウヨと出てきそう。「おいしいんだから。卵を数日乾燥させてつくったらいいよ」。へえ……と言ったひょうしに、つい手が

出てしまった。食感はやや硬いチーズのよう。味は、角煮の卵に似ている。醤油のような調味料で濃く味付けされてた。「初めてだよ！自分から食べてくれた人！」

「夜市」が彼女のお気に入り。狭いところに激安の店・屋台がたくさん集まって夕方から夜中の1時まで営業している。まるで毎晩夏祭り。見たことのない食べ物並び、店員と客のやりとりも活気に満ちて印象的だったとか。鼻をつく臭いにも

新・台湾の歩き方 「電車男」夜市…「ギョウ出るけど」

を490円で買ったよ。へえ！いや、知的所有権うるさいご時世に、ソレ大声で言っちゃダメじゃない。「んーまあ、ときどきゴキブリが出るけどね」。へっ？と引きつった顔を楽しむように、彼女はケロツとして言った。「夜の中大と同じくらいだから平気だよ」。中大にゴキブリが出るの？「夜になると普通にいるじゃん。ペデ下に」へえの数を数えそこなって、私の口元は「へ」の字。(明)

夏休み、N子は地元のドラッグストアで、レジ係のアルバイトをした。

お客もまばらな朝早く、高校生と思われる女の子2人組が来店。お店に入ると、2人は迷わず化粧品コーナーへ。「この色、超カワイ〜！」などと言いながら、マスカラ、アイカラー、口紅など、次々と商品を物色している様子。

ギャルっぽく派手な格好をしているのに、2人はほとんど化粧つ気なし。今どきの高校生にしては不自然だなあ、と思ったりもしたのだけれど。

「コンビニ・バイトの夏 高校生2人がやってきた…」

ふと見ると、2人は置いてあった試供品(しかも新商品ばかり)を使って、メイクをしながら試供品を、お使ったかもわからない試供品を、お構いなしにガンガンつける2人。メイク中の女の子の顔なんて、とてもカワイイとはいえないのに、それもお構いなし。2人は、まるで家でメイクをしているかのよう、ファンデーション以外の試供品

はほとんど使って、順序良くメイクしていった。最後にリップグロスをつけ、ぷるぷる唇になってメイクは完成。

以前、テレビ番組で、この2人と同じようなことをして、お店に迷惑をかけている高校生を紹介しているのを見たことがあったが、まさか実際に自分が目撃するなんて。他のお客のレジ打ちをしながらも、N子は2人の行動が気になり、その一部始終をしっかりと目撃した。

さすがにあれだけ試供品を使いまくって、何も買わずに出て行くのは失礼だと思った……かどうかはわからないが、2人は、お店が一番安い300円のマニキュアを購入し、パツリメイクで去っていった。ほかの店員もしばし呆然。だれも注意しなかったの？と聞いたら「だってもうびつくりしちゃって。夏休みはいろんなところに遊びに行ってお金使うから、化粧品の出費はけっこう痛いんだよねえ、きつ」と弱々しく語るN子だった。

(奈)



「自 民党圧勝」

9・11午後8時、開票開始と同時に、大きなテロップが踊った。NHKも、民放各局もみごとに同じ出口調査による選挙結果予測だという。「自民単独で300議席へ」だの「民主100前後、大敗退」だの……微差はあっても、各局同じゾーンで予測議席数をはじき出していた。

「おいおい、何だよこれ……」

とたんに事務所のかなかは静まり返った。ここは、東京選挙区、民主党候補の選挙事務所である。「でも、うちの候補は別だよ。そうですよね、と自分を励まして。」

ここも、民主党前職と自民党からの落下傘候補の一騎打ちとなった。民主陣営は7年間の実績で地元根ざした自負はあるが、つむじ風のような「郵政解散」「小泉旋風」に、不安もぬぐえずにいた。

午後10時半。途中経過が入った。

「え……？ 負けてる？」。張りつめた空気がざわざわと揺れる。「なんで」「まさか……」。あちこちから不安の言葉が飛び交った。どうにも意気があがらない。まるで、お通夜。「あれ？？ 事務所の雰囲気がないんだか暗いぞ〜」

どうした、というように、声を発したのはなんと候補者本人である。事務所への顔出しがこの時間だった。

「選挙期間内にやれることは全てやった。みなさんも一生懸命やってくれたと思うっているので後は待つだけです」

落ち着いた物腰。事務所に笑顔が戻った。

まだかまだかと待つうちに、11時を過ぎた。そろそろ終電の時間。帰りの途中で結果が生まれようと祈りながら、家へ急いだ。部屋に駆けこんで即テレビとパソコンのスイッチを入れる。

瞬間、民主党事務所は凍った 9・11ボランティア・ドキュメント

「……落ちてる……」

あの後、追いつけたものの、逆転できなかったのだ。その差、わずかに4700票余り。

呆然として画面を見てみると、名前の横に当選のバラ。「あ、そうか！……比例復活だ！」

いくぶんホロ苦さはあるけれど、ホッと肩から力が抜けた。そんなわけで、当選議員名を紹介したい。



東京20区、加藤公一議員である。

—— 思わぬ選挙体験。もとは議員インタビュシップである。

国会議員のもとで働くなんておもしろそうじゃない!? とNPO団体ドットジェイピー主催の夏休みのインターシップにエントリーした。6月のことである。

が、小泉さんの「解散！」の一言で吹っ飛んだ。インタビュ先の議員は失職。インタビュも中止。はぐれたままに、選挙事務所に誘われて、党のロゴの入ったTシャツを着て、街宣車に乗り込みニコリ笑って手を振る日常が始まっていた。インタビュ改め、なしくずしの選挙ボランティア初体験。

「きょうは目標数を達成しました！」。事務所の一室から歓声が聞こえる。電話チームだ。「みんなが友だち呼んだり、知り合いを連れてきたおかげだよ」というのは同じ学生ボランティアのM子。「おれが一番たくさん電話かけたんやけどなっ」と横から自慢そうに身をのり

だしたのはBさんだ。

「街宣チーム帰りました〜！」。候補者と一緒に回る街宣チームの帰りは遅い。「けっこう聞いてくれたよ」と上々の戦況報告。「町の人に手振るのチョー楽しい！」とA美も燃えていた。

熱い10日間はあっという間に過ぎていった。9・10午後7時50分。「みなさまのお力でどうか、どうか私を国会へ行かせてください！」

選挙事務所前での候補者最後の演説を、仲間たちとともに聞き入ったのだった。もちろん、選挙区での勝利を信じて、だったのだが。

選挙戦の熱さ、一瞬の暗転、そして比例復活——。議員インタビュシップよりも、よほどドラマチックな一大政治ショーの現場にいたことになる。

「バカンスもデートも行けなかったけど、刺激的な夏だったね」と親友に話したら、

「そっちは比例復活したからいいじゃないの」とムクレた。

同じ政治学科の彼女がボランティア応援した民主党候補は、元敗、だったそうである。

(和)

「私、テレビに出るの！」。夏休み、久しぶりにA子からメールが届いた。どこかのニュースの野次馬にでも思ったら、バラエティ番組のロケに参加してきたらしい。

8月21日にウエディングハーモナイザー養成講座が開かれる、というのが元々の話。所属しているサークルで耳にはさみ、3人で出向いたそ

うだ。スーツに身を包み、集合場所に到着してみると、女子大生対象というのに、まわりは

社会人とおぼしき20代後半の女性たち多数。

会場の結婚式場につくと、テレビカメラと照明、マイクなどを持つた人たちが忙しそうに動いていた。

「ニュースの取材なんです」という

授業は30分ほどで終了。「ずいぶんカンタンね」と思っていると「ここで、特別講師の方に」と引き継いで、登場したのは、お笑いタレントの友近だった。普通なら会場騒然の場面なのに反応はいまいち。多くは、バラエティ番組の撮影を先刻承知だったようなのである。TVスタッフも「慣れきった客」にやや不満顔だったが。で、友近講義――。

「私

「最近はできちゃった婚というのがはやってますけど、言葉が悪いですよ。私がお勧めするのは」といながら黒板に「でちゃった婚」「きちゃった婚」と書き、「他には、若気の至り婚とか、フライング婚とかね」。いきなり口ウソを取り出して、「お子さんがうるさかったら、こうしましょう」と、鬼や天狗のまねをしたりして、けっこう笑ったのだけ

れど。終わると、スタッフから「メモを

聞いてないよー！

友近には会えただけ

とったり、うなずいたりしているところを撮りたいので

と言われ、笑っているところやキョトンとしている表情をしたり。お弁当の時間に、スタッフの人に、「みなこれが撮影だって知ってたの？」と聞かれて、「なんとなく。この前も友近さんが来るっていうイベントがあつて、それも撮影だったし」と友達のM子も、K子も。「勘がいいね、マイツナ」と頭をかいていたそう。知らぬはA子ばかりだったのだが、TV番組の裏側も見られ

たし、とメールには絵文字がいっぱいだった。

(琴)

「ちよくちよく様子は確認して

たのよ、でも難なくこなして

るように見えたから安心しちゃう

て」

A子が語るのには、バイト先のレストランでの珍事。夏休み、新人・M美の指導を任せられた。大学生だけでバイト初体験、というのでフリードリックコーナーをやってみようことにした。ピッチャーのドリンクが無くなったら補充する、といった簡単な仕事。一通り口で説明して、自分の仕事に取りか

かったという。ふと目をやると、M美の顔が青ざめているのを見て、青ざめた。

「表にはオレンジジュースが補充されているのに、裏にはマンゴージュースを開けた形跡が……。確かにその2つ、色がそっくりなのよ。やつちやつちな一っと思っただけど、声をかけるヒマがなくてね」

2つのジュースを混ぜたら当然味も変わる、客の苦情も必至。

「でもね！彼女そのまま仕事を続けたの。ドリンクを注ぐお客さんの様子をうかがいながら」

オレンジジュースと書

かれた「ミックステイクス」が滅びていくにつれM美の表情からニゴリは消えていった。「私も一緒になつて苦情が出ませんようにって願っちゃった」

残りあと3人分、2人分……彼女の表情は明るくなり、A子もホッとした、そのとき、「すいません、このドリンク変な味するんですけど」。バイト後、店長に呼ばれた。A子はふたり一緒に叱られるのを、もちろん覚悟した。するといきなり、

気づかぬ客が悪いのか……

「特製ジュース」の後味

M美はペコリと頭を下げた。「ごめんさ、私、ジュー

ス混ぜちゃったことに気がつかなくて……」

え！気がつかなかったって？

店長は、「仕方ない、仕事を任せっきりにした先輩に責任がある」。

結局怒られたのはA子だけ。「私も悪いけどね、悔しいっていうより感心しちゃったわ」

世渡り上手になることも必要なのね。M美に学んだというA子だが、

「あー次の授業、私の分も出席カードもらつといてくれる？ 私バイトなんだ」。

もうすっかり世渡り上手。(直)



ク

ラス仲間で、「何の肉が好き？」という話になった。

「やつぱり、犬肉かな」

とAが笑顔で言った。近くにいたBも、激しく同意した。ともに中国からの留学生である。

「エッ、イヌ！？」と周りは大騒ぎ。

2人は赤犬の、そのまたナントカ犬カントカ犬がおいしいんだよ、最高！とかいってえらく盛り上がった。母国中国ではイヌを食すことと日常茶飯と聞いても、この日本にありては……。『どんな味？』などと飛び交う質問のアラシに、Aは提案に及んだ。

「いくら言葉で説明してみても分からないだろうから、イヌ食べに行こう!!」

ホントかよ。ついにイヌを食べに行くことになったのである。ものものハズミって、怖い。

暑い盛りりの夜だった。『前期お疲れ様でしたクラスコンパ』として、新大久保のアジアンレストランで、イヌを食す会が挙行された。日程の

せいか、イヌにおびえたか、クラスコンパに集まった者9人。いつもは、30人以上が集まるというのに。

手慣れたAのセレクトで、頼んだ

犬料理は犬鍋。イヌの骨でじっくりダシを取ったスープに、イヌのいろいろな部分の肉がたっぷり入っている一品。メニューにも『おすすめ』と大きく書かれて

犬鍋が運ばれてきた。犬肉以外にも、豆腐や春雨、

チンゲンサイなどが入っていて、全体は唐辛子ペーストで赤い。犬肉は一見、鶏肉に見えるので、キムチ鍋と言われれば、何の疑問も持たずに食せそう。が、このたびは、はつきり「イヌを食べる企画」とあれば、もはやアタマをごまかすこともならず、料理が出てきたときの反応はそりゃあもう複雑なものがありました。目を逸らしたり、腹を押さえたり、



ウムとうめいたり。たまりかねて、「わざわざ来たんだから！」と声が高くて、みんなで、一斉に口に運んだ。

「味は、普通だね」「鶏肉がちよつと硬くなった感じ」「意外とイケる」……。

食してみれば、こうである。言わ

どうするー
チワワがゆらゆら
日中友好？
禁断の「犬鍋」コンパ

なきやいののに、一人の発言で、みんなのハシが止まった。「アイフルのCM

の犬、チワワだったっけ？ 食べた瞬間、あのワンちゃんが浮かんできちゃった」

もういけない。「どうするーアイフル？」が胸のなかを流れ、切ないチワワの顔が大写しで浮かんできた。が、それも一瞬。「食用犬の肉だから、チワワじゃないから大丈夫。おいしいよ」とAの声で、一同、再び鍋に。さっきアイフル発言をした

彼女も「そっか」と笑顔で食べ始めた。タフな胃袋。私は、チワワが棲みついてダメだったけど。

犬鍋が食べ終わった頃、Aから次のクラコンの提案があった。

「中国では、へびも食べるんだよ!!」

なので、次回はへびを食しに行つてきます……。

(ん)



デ

イズニールランド名物スプラッシュ
シマウンテン前。120分
待ちの看板にうんざりして引き返そ
うとしたH子の足を止めたのは、女
子高生2人の会話だった。

「出たのよ」「出たって何が？」

「お・ば・け」

女子高生版稲川ジュンジ？

「ひと月前の話……。親戚の民宿に、
急きよお手伝いに行くことになった
のよ。1週間の住み込みだったんだ
けど、そこで……。見ちゃったのよ。
列は遅々とし

て進まない。

「私の部屋

は2階建て2

階の6畳間で、景色が良くて最高
だったわ。あれを知るまでは……。
グツと口を結びH子は心の準備をし
た。「初日は疲れちゃってすぐに寝
ちやっただけ。でも起こされたの
よ」「なにに？もしかして、人の

うめき声とか？超怖いんだけど……。
人の話は最後まで聞け、とハタチを
過ぎたH子は咳払いをした。

「コトコトコトコトコトって、誰かが
歩く音なのよ。あれは、前世、相当
短距離早かったと睨んだわ」。隣の
ギヤルは「はあ？ 誰かが走ってた
んじゃないの？」。2階の上は

ないんだよ。H子はまた、咳払いした。

「でね、怖くなって気のせいって
思うようにしたの。でもそれが一人
じゃなさそうなの。幽霊たちがいま
にも天井を破ってきそうだったわ」

「で、何の亡霊なの？ その民宿
で昔なにかあったとか？ 金田一
みたいでスリルある〜」。ホント。

「で、6日目のある夕方、ついに
正体が判明したの。台所の床にお団
子が……」「もしかして、その霊は
団子に恨みがあったのね？ 食べ物

の恨みは恐ろし
や〜」「それが
……ごめん、怒
らないでね」と

「おたのよ」「何が？」

「お・ば・け」

稲川ジュンジが言うことに、

「その団子、ネズミ取り用のホウ
酸団子。コトコトはネズミが走る音
だったってわけ」

「キモクなくらい!?」と
ギヤルは叫んだ。「ネズ
ミってけっこう夜まで起
きてるんだ〜」

これなら120分待ち
も苦にならないわね、と
2人のアカルイ会話に打
ちのめされたH子であつ
た。

(花)



八

月末、高校3年次のクラス会
があり、5カ月ぶりにYと会
うことになった。「私、合コンの女
王になるから！」と高らかに宣言し
て高校を卒業していった悪友である。

一度もらったメールときたら、「体
重が5キロ痩せたんだー」と文末に
ハートの絵文字を使い、浮かれきつ
た文面の近況報告。普段から、「ダ
イエット、ダイエット！」の私への
イヤミじゃないの、というような内
容だった。先にYに会った友人によ
れば、「Yちゃん、
すつごく可愛く
なってたよ」と

大・絶・賛!!
Yと会うのが楽しみ。

「スポットライト浴びて」

「合コンの女王」の变身ぶり

いよいよ当日。クラスの懐かしい
メンツが揃い、「髪、伸びたね」だ
の「お前、髪の毛染めた
だろ」だの言い合って、
久々の再会を喜び合った。

そこへ、Yから遅刻す
ると連絡が入り、彼女を
待つて会場へ向かうこと
に。「Y待ち」の状態で
ある。

Yが乗っていると思わ
れる電車が駅に着いた。

さあ、いよいよ待ちに待った大トリ
の登場だ。皆がソワソワして彼女の
登場を待ち構えている。改札からの
人波に、「Yちゃんはどこ？」と探
すが、見当たらない。列がとぎれた
あたりで、瞬間、辺りのライトが落
ち、スポットライトの中に……とい
う雰囲気、Yが改札から出てきた。
大物ぶりを発揮しながら。

「久しぶりー!!」とYは手をブ
ンブン振って、近づいてきた。ノー
スリーブとハーフパンツという露出
の多いフアツ
ション。細く
て、スラッと伸
びた腕と足。全
体的にすつきりとした感じで、もと
もと大きかった目は一段とパツチリ。
私たちの期待を裏切らなかつた。

肝心の「恋愛の方は？」なんて聞
くと、「3日で彼氏を振っちゃった」。
「彼氏が欲しい」と、お互い一途
だった高校のあの日の純情はどこへ
……。

クラス会はまるで「恋のから騒ぎ」
ふうだったけれど、うれしい楽しい
時間。「ダイエット、ダイエット!」
とまたつぶやきを新たににして、浮か
れ気分が家路についた。

(凜)